

# 往昔の官道

—名古屋附近—

水谷鏘

名古屋の町は慶長十五年金の鯨が城の頂きに輝き初めてから、後に開けた未だ三百有餘年の都である、其れ以前は蓬が原の荒れたる内に「名古屋」の名をなした今川氏以來の所謂「根古屋」が北部に點々あつたに過ぎぬと言はれておる。然し熱田なる土地は日本武尊の東征の時既に世に知られた土地で名古屋の岡の突先きに船着よろしく宮の宿として知られて來た所である。

今の東海道は熱田から名古屋の北部まで大體馬の背の上を辿るに似た最高地を通つてをる、此の當時若し此の背の上に立つて、名古屋から西の方を眺めたならば現在の海岸から一里位は蒼然たる海、それから尙ほ一里位奥までは干

瀉の地、潮滿れば田鶴鳴き渡る荒茫の洲、それより北は木曾川の亂流せる内に吹上げの砂で出來た中島と稱せらるゝ洲原や門洲が所々に起伏して其間を迂余曲折して木曾川の派流が朝宗する有様を一目瞭然と指呼し得たであらう、此の有様は現在の海岸にある潮除の大堤防と木曾川にある所謂御園堤等の人間の作爲を無いものと考へて自由に潮水を奔流せしめたならば、敢て史實に徴せずとも今の地形からしてよく知り得る事柄である。

若しまた首を回して東を眺めたならば、是れまた潮が自由に入り出して小一里も奥まで滿ち込み、かの有名なる年魚市ウチガタや鳴海なるみが萬葉集に讀み込まるゝに至つた理由であ

る。

即ち名古屋から熱田までは岡續きであつたが、それから西も東も干潟であつた。

此の時に當つて當時の街道が如何であつたか。

後に木曾川の氾濫が除かれてから潮新田が一時に築き上げられ、海岸には大堤が出来、潮が沖に追ひやられて道は時々變へられた、而し桑名七里の渡は尙ほ有名なものであつた、佐屋三里の渡もつい維新前頃まで往來した、今も尙ほ木曾川、長良川、揖斐川とも長い渡船になつてゐる。

鳴海瀉や年魚市瀉は七百年前、

故郷は日を経て遠く鳴海瀉

急ぐ汐干に道ぞ苦しき

なごみ汐干に走り越した苦しみも新田の樂かる、と共に樂樂を通れる事になり歌草の名所を失ふに至つた。

桶狭間の古戰場は信長の奇勝を奏した事で有名な所であるが、今の國道は是れ以後に改修したものである、二村山の名所は今も唯山中に秘められてある。

家康は岡崎から名古屋の城に往來する毎に、東海道は甚だ迂廻してをる言つて先頭に立つて平針街道と言ふ近道を作つた。

尾張三河の土地は織田、豊臣、徳川三代に互つて有名な英傑の産地である、是等の英傑が何かに土地に遺した土史の秘められたものがある。

私は元來史に志すものではない、従つて考證甚だ拙きを覺ゆるものであるが、只何んもなく昔の仕事に教へらるゝものがある様な氣がする、故に半は道樂に書いた一篇が是れである。

### 尾張の水運

此編の主眼は道路の變遷を記述するのが目的ではあるが、前に記した如く尾張は水の國である、道路の出来る前如何に水上交通が開けて居たかについて、一言述べて見たい、勿論是れは附けたりであるから簡単に過ぎぬ、

催馬樂の風俗歌に、

伊勢人は賤しきものをや、なごてえば

小舟に乗りて荒き海を漕ぐや

こあるは伊勢の海人の事である、尾張は海部氏が住んで海交通をした事は明かである。天保五年に津島の附近から剝船を掘り出した事がある、是れは神代の石桶船イヌボネにして長さ十間もあつた、此の當時大部分干潟ではあつたけれども木曾川の分派が幾筋にも流れて居た故に、舟は自由自在に上下し得たのである、日本武尊は東征の途、多度津の附近から舟で名古屋の西部に着かれた様に、史家は唱へて居る、今昔物語に大きな荷船が尾張の地を漕ぎ上り、又は船で美濃に往來した事を載せてゐるのは、一千年より尙以前に於て盛んな船運のあつた事を證してゐる、織田信長が清洲城から急に小牧山に城を移した時も城下の家財を船で運漕した事は、信長記の載せる所である、是等は皆木曾川の分派せる河筋を漕ぎ上下したのである、當時現在の小牧山は帆卷山と稱せられて船人の帆を巻く目標にせられ、其の麓の近くには今も船津と稱せらるゝ所がある。

豊臣秀吉が木曾川を改修して以來、尾張の地は分派の水を失ない、今では僅に小溝を残すに過ぎざれども、此の點は昔がどれ程便利であつたかも知れない、若し許さるゝならば木曾川のあの盡きない水を、尾張平野に疏流して自由自在に舟運を開いて見たい。

尾張の南部は今も水郷である、車の利用よりは舟漕ぐ方が便利である。

今も木曾川の流れに船の上下する事は、前に述べた通りであるが、其外其の派川なる鍋田川や、また昔の木曾川跡と稱せられてゐる日光川、さては庄内川治水の爲めに天明年間に開鑿せられたる新川なども、數百石積の船が自由に航行し海岸よりは數里の奥まで貨物の運送を安價にするのである。

是等の川々は悪水路ではあるが追々土地開發の出來る曉に於ては立派なる運河になる資格を有してゐる、而し何れも南北縦貫の水路であつて此の相互連絡は、道路及鐵道の外何者もないのであるから、早晩は先きに述べた通り木曾

川の水を疏通して、一大運河網を敷く外はない、かくして尾張平野は水陸相伴つて、覺醒しなければならぬ。

残念なれども、水運の事に就ては右の程度に止めて詳しく事は別の機會に譲ることにする。要するに、尾張の國は平々坦々たる四十平方里、將來は必ずや大に水運に庄きなければならぬ土地にして、是れが動脈は言ふまでもなく木曾川の水でなければならぬ事だけを、路史を述べる初めに當つて、讀者の記憶を願たい點である。

### 東海道木曾川より名古屋まで

此の道は必ずしも一定してゐない、先づ尾張から京都に行くのに、かけ離れた二本の道のあつた事を思はなければならぬ、其の一つは尾張美濃近江を経て京都に入る現在の東海道筋で、他は尾張から伊勢伊賀を経て大和に入る道である、此の二道共に有史以來の古い道ではあるが、古へ帝都が大和にあつた關係から伊賀路即ち鈴鹿を越えた道が比較的多く交通に供せられ、日本武尊の東征路もほゞ此の路

線に當ると思はれる、和銅六年木曾路が開通し得らるゝ事となり、聖武帝の遷都ありて以來追々近江を経て美濃に出る道の交通が頻繁になつた。史家は言つてをる、此の二本の道は蒼津又は熱田附近で出逢ひそれから東へは殆んご一貫してをる、此の二本の道の内先づ美濃路即ち今の國道二二號より述べやう、

長保四年（西曆一〇〇〇）赤染衛門は其の夫大江匡衡が國司として尾張の國に臨むので、遙々京都から今の松下の國衡に來る道すがら、馬津の宿で、

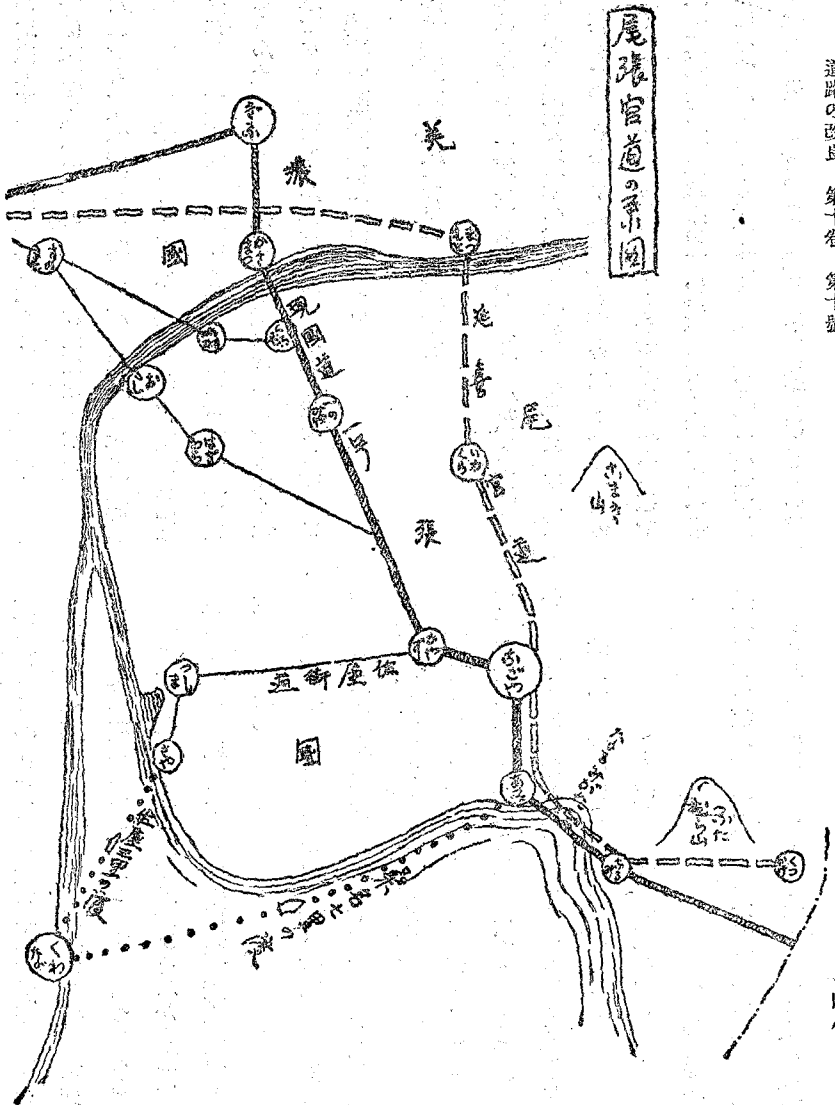
又の日うまづ言ふ所にさまる夜ふる假舎にしばしおりてすゞむに小舟にをのこ二人ばかり來てこぎ渡るを何するかさ問ふに冷かなる水汲みに沖にまかるこそ言ふ

沖なかの水はいさゞやぬるからむ

こゝ濱なやを人の汲めかし

（赤染衛門家集）

是れはさの道を來たのであるかと言ふに人によつて種々な説がある、例へばある人は木曾川の流末を渡つたものな



りと言ひ或る人は中流なりと言ふ、是等は何れも想像する外はなく、今地名にしても残つてをるものはない、而し此の馬津なる位置は古の道を知るのに、最も大切な土地である、延喜式の宿驛は、

尾張驛馬傳馬 馬津新溝兩村各十四

(延喜式二十八兵部)

こある古驛なるが故であるまた一條天皇永祚元年(西曆九八〇)尾張の國司藤原元命が、甚だ暴威を振つた事について尾張より訴へ出たる解文の内に、

一請被<sub>レ</sub>裁斷依<sub>レ</sub>無<sub>三</sub>馬津渡船<sub>一</sub>以<sub>三</sub>所部小船並伊邊人<sub>一</sub>令<sub>三</sub>渡煩<sub>一</sub>(中略)就<sub>レ</sub>中馬津渡是海道第一之難所官使上下之留連處也

と陳情してをる、是等から見ても馬津は海道の難所であり、木曾川沿ひの地にして尾張の國に屬してゐた所でなければならぬ筈である、果して此の地は何所であらうか、赤染衛門の辿つた道を尙ほ參考に擧げて置かう、

七月七日愛知川に云ふ所につきぬ、又の日天津と言ふ所

にこまる、其の夜風いさう吹き雨いみじゆ降りて洩ぬ所なし、水まさりて、そこに二日三日あるほごに、氷魚を得て來る人あり、此頃はいかであるぞこ問へば、水まさりぬれば此なん侍るこいふ、それより抗瀬川と言ふ所にこまりて、

夕暗のうふねにこもす篝火を水なき月の影かこぞる。

抗瀬川は大垣附近或は赤坂町であるこも云ふ、「影かこぞ見る」から續くのが「又の日」云々の先きに掲げた文である。

又新溝と稱したのは何所であらうか、これまた明瞭ではない、然し名古屋の北三里程の地に岩倉と稱せらる、町がある、此の町の名は決して古いものではなく、言い傳へによれば、洪水の害を避けて町を移し岩倉と名付け、舊名は新溝と言つたこ古老は語る、また此の附近の古い御寺に、新溝山と書いた書や鐘や水鉢がある、其上に字名には東新溝、北新溝なき新溝と名をつけたものが四ヶ所もある、是等から考へて見れば新溝と言ふ一千年前の宿驛は、

此の岩倉附近であるに斷定が出来る様である。

此の土地は有名な小牧山から西一里餘の土地であつて、

今では名古屋から北日本ラインで有名な丈山及名古屋から一宮市及名古屋から小牧に行く三本の電車線路の分岐點で、相當に大きな町である。

かくの如く新溝の地は稍想像し得る様であるが馬津はさうしても判らない。

嘉永の初め、津田正生氏は葉栗郡松本村なる地名に對して、

地名馬津本の約にて、まつもここ云ふなる可し、中古の馬津の家殘なり、但しむかしの馬津の驛は、此松本一村に限らず、中屋、若宮、地無動寺、松倉、島、圓域寺、栗木、松原島、藥師寺、笠松あたりまで馬津驛中の内にて云々。

(尾張地名考)

ここ云ふ此の説も無論想像ではあるが、地理的に考へて何となく當らずとも遠からずの觀がある、何とすれば當時二の枝(木曾川の分派)は一宮附近から西南に汎濫し、かな

りな勢で流れたに想像する事が出来る故である。

神護三年(西曆七六七)秋八月甲辰海部中島一郡大水賜<sub>ニ</sub>尤貧者殺人一斗<sub>ニ</sub>〇九月壬申尾張國言此國與美濃國一堺有<sub>ニ</sub>鵜沼川今年大水其流没<sub>レ</sub>道毎日侵<sub>ニ</sub>損葉栗中島海部三郡百姓田宅又國府並國分二寺俱居<sub>ニ</sub>下流<sub>ニ</sub>若經<sub>ニ</sub>年歲<sub>ニ</sub>必致<sub>ニ</sub>漂<sub>ニ</sub>損<sub>ニ</sub>望請遣<sub>ニ</sub>解工使<sub>ニ</sub>復<sub>ニ</sub>其舊道<sub>ニ</sub>許<sub>ニ</sub>之

其の後仁明四年齊衡元年同じく水害を受け、貞觀八年(西曆八六五)には木曾川を狭んで尾張と美濃は川筋の争いから、大合戦を起し河水流<sub>レ</sub>血野草露<sub>レ</sub>膏<sub>ニ</sub>云ふ大慘事を見るに至つた是れは餘分の事なる故に、略して置くが、要するに尾張の西半は蜿々として何本かの大川がうねりうねつて東北から西南の方に流れたのである、其の爲めに現在の東海道筋は到底渡し無しでは交通が困難である故に、此の煩を避けて稍東方に迂廻した事は成程に想像が出来るのである。

名古屋の東から岩倉、岩倉から尙ほ眞北へ木曾川に出、松本から大垣へ行けば、順路も左程不都合とも思へない。

松本は犬山から西約一里飛行場である各務原のすぐ南の地、岩倉までは三里、大垣までは六里餘である。

先づ以上の如き理由から馬津を岐阜縣羽島郡中島村松本と考へて不合理なる點もない様である、今は岐阜縣に屬してをるけれども、天正年間より以前美濃尾張は境川を境として羽島郡の大部分は尾張に屬し、従つて松本も勿論尾張の地であつた事は明瞭であるし、また赤染家集の水汲む小舟も木曾川の流れてこそ初めてあり得る事柄であり、尾張解文の難所と稱するも水勢の強い事を意味したと考ふれば何れも不合理の點はないのである。

以上の理由によつて尾張の延喜式による官道は、美濃路を大垣方面より現在の各務が原に出、境川即ち木曾川を渡り松本を経て、(現在の木曾川は寧ろ派川にして廣野川と稱せられしものと想像せられる)古知野(口野の意か)布袋野(果野の意か)を経て、岩倉に來り庄内川を徒渡りして名古屋の東を鳴海に出、二村山を超へて兩村の宿に來たものと思はれる、是れが史に載せられた間道の古いもので

あると言ひ得る、また寛仁四年(西曆一〇二〇)更科日記の著者は、鳴海からすのまたに出でをる、此の道は今述べた官道と一致してをるかごうか、甚だ疑はしい、夫れは此間の記事全く記せられてゐないからであるが、思ふにたゞへ官道が馬津新溝を通る線であつたとしても尙ほ外に美濃との交通には何本かの立派な道があつたことは想像に難くはない。

仁治三年(西曆一二四一)

株瀬と云ふ所にしまりて夜更ける程に、川端に立ち出でて見れば、秋の最中の晴天清き川瀬にうつりて照る月なども數見ゆるばかり澄み渡れり、二千里外の故人の心、遠く思ひやられて旅の思ひいと抑へがたく覺ゆれば、月の影に筆を染めつ、  
「花路を出で、三日株瀬に宿して一宵しばしば幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめかづく、遠情を先途一千里の雲に送るなき或家の障子に書き付くる序に、  
知らざりき秋のなかばの今宵しも

かゝる旅寢の月を見むきは



萱津の東宿の前を過ぐれば、そこらの人集まりて里も響くばかり罵りあへり、今日は市の日になむ當りたるじいぶなる往還のたぐい手毎に空しからぬ家土産も彼の「見てのみや人に語りむ」を詠める花のかたみには様變りて覺ゆ。

花ならぬ色香も知らぬ市人のいたづらならで歸る家路も、尾張の國熱田の宮に至りぬ。(中略)この宮を立ち出でて濱路を行く程有明の月影ふけて、友なし千鳥々々おこづれ渡れる旅の空の愁へ、そゞろに催して哀れかたゞ深し。

故郷を目を經て遠く鳴海瀆、いそぐ潮干に道ぞ苦しき、やがて夜の内にて二村山にかゝりて、山中なごを越え過ぐる程に、東やうく白みて海の面遙かにあらはれ渡れり波も空もひみつにて山路に續きたるやうに見ゆ、

玉櫛笥二村山のほのくゞり明け行く末は波路なりけり

(東關記行)

右は尾張國の旅行記である。

西曆一千年赤染右衛門等は馬津を通過して中島都に來た

のに、後二百四十年東關記行の著者は株瀨川から萱津に來てをる、此の著者は朝株瀨川を出發して夕方熱田神宮に參拜して二村山では夜を明してをる、十七八里の行程なる事から察するに可なりな健脚である、而し木曾川の渡しに就て一言も述べてゐないのは如何なる理由であらうか。

萱津は現在の名古屋から西約一里の地であつて、伊勢街道との追分である、光行は株瀨から萱津に來たと言へばさうしても起、笠松の渡を過ぎて來てをる、是等の渡船が著者に對して書き残す程の深き印象を與へなかつた事は既に出水期を終りたる仲秋の頃なる爲めか、または木曾川分派の水が甚だ少なくて平穩無事に通過し得た事か、何れかに因るであらう。

建治三年(西曆一二八〇)阿佛尼は

洲俣さかや言川には舟を並べて、眞辟マサヒの綱にやあらむ、

かけ留めたる浮橋あり、いみ危げれぎ渡る、この川堤の方はいみ深くて片方は淺ければ、(中略)また一宮と言社を過ぐると、

一の宮名さへなくかし二つなく三つなき法をまもるなる  
べし、二十日尾張國下戸オウダ云驛に行く、よぎぬ道なければ、

熱田の宮へまゐりて覗きり出でて書きつけて奉る歌、

いのるぞよ我が思事なるみ瀉、

かたびく汐も神のまにまに、

鳴海瀉和歌のうら風へたてずば、

同じ心に神も愛くらむ、

満つ汐のさしてぞ來つる鳴海瀉、

神やあはれみみるめたづねて、

雨風も神の心に任すらむ、我が行く先のさはりあらず  
な、鳴海瀉を過ぐるに潮干のほぎなれば、障りなく干瀉を  
行くをりしも濱千鳥いこ多くさき立ちて行くもしるべ顔な  
る心ちして、

濱千鳥鳴きてぞ誘ふ世の中に、

あこめむこ思はざりしを、

すみだ川の邊にこそありき聞きしがき、都鳥こいふ鳥の嘴  
こ足こ赤きはこの浦にもありけり。

こ問はむはしこ足こはあかさりし、

我が住む方の都鳥かこ。

二村山を越へて行くに、山も野もいこ遠くて日も暮れ果  
てぬ。

はるばるこ二村山を行き過ぎて、

なほすへたぎる野邊の夕闇。

阿陀尼は洲股ヌクダでも、長良川を渡り、足近アソジカを経て起の上流  
玉の井附近で木曾川の分派川を過ぎ、黒田一宮に來り、己  
のが不平を漏しつゝ、萱津に來た、此の道は當時に於て、  
最も交通の多かつた様に思はれる、源頼經が嘉禎四年（西  
曆一二三八）上洛した時にも、往復共に此の道を通り萱津  
の宿で病氣を發し、其の間に水害で流されたる股洲足近の  
船橋を修理した事を傳へてをる、又建長四年（西曆一二五  
四）宗尊親王の關東下向の折にも黒田にて晝食し、萱津に  
一泊せられたる云ふ、又別に伊勢に出る道は此の當時に於  
て盛んであつて後に述べる通り、貞應二年の海道記には此  
の模様が記されてある、其處で木曾川及長良川に當時何個

所の渡があつたかを調べて見るに、承久の亂（西曆一二二一）の節官軍を遣して關東軍を防がしめた渡場の名稱は、鵜沼の渡、氣瀨の渡、摩免戸の渡、食の渡、及び洲股の渡、市腋の渡、板橋の渡、等であつた、此の内鵜沼の渡、豆渡（松本）の渡、市腋の渡及食の渡（境川の渡である）は木曾川の渡である事は、殆んき疑のない處であつて、當時既に上中下流共に交通の相當頻繁ありしを知る事が出来る。

此の當時に於ては木曾川は大部分の水が、今の流路によらずして、豆渡松本から境川に流れ込み、足近小熊附近から竹が鼻の北を長良川に流れ込み、其の爲めに尾張部へは大水の時の外は餘り流れ込まなかつたであらう、何となれば今迄例證した各記録が現在の木曾川筋の渡に就て、特に書き残した物なく何れも洲股足近、即ち長良川近くの渡を傳へてをる故である。

是等の交通變遷から考へて、木曾川が尾張の土地に大氾濫をした事は貞觀以前即ち今から少くも千二三百より

も尙古い時代である事を知り得る、又此の變化は貞觀の治水戰爭にて知り得る通り、自然に河狀が變化したのみならず、幾分人力を加へた事も事實であつたであらう。後には豊臣秀吉が現在の流路を改修して、境川の水を少くし兩國の境を新川によつて分ち又其の後徳川氏が御園堤を作つて一大治水工事を行つた事もあつた。

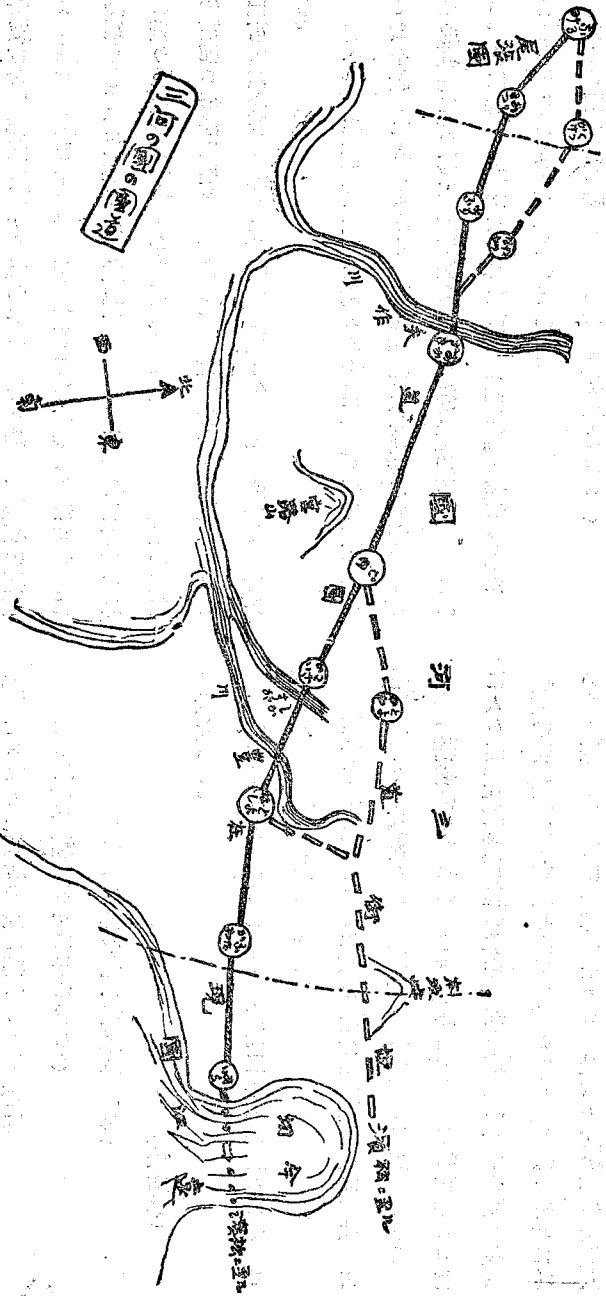
扱斯くの如くに間道は時代々々に西に移つて、名古屋方面から洲股方面に至る最も近道を迎る事になつたが織田信長は永祿七年（西曆一五六四）井の口に居た齊藤瀧興を走らせて、是れを岐阜と改稱し清洲から岐阜までの道路を改修して、後是れが間道となつて今日に至り、起の渡や、玉の井の渡は勿論墨股の渡も甚だ衰へる結果になつたけれども、名古屋京都間の近路は地理上やはり舊道の方でなければならぬ。

### 名古屋から西三河まで

昔は無論名古屋なる町はない延喜前の古道は今の名古屋

市街の東部を過ぎてゐるたものらしく言ひ傳へられてゐる、  
 而し下つて室町鎌倉時代には藝田の官から北に丁度現在東

而し名古屋開府せられて後は清洲名古屋間の大路が信長に  
 よつて改修せられ、是れが現在の國道となり爲めに菴津は



海道鐵道線が名古屋市街を横斷せる附近から西に折れて、  
 今は跡形もないが、斜め北に菴津の追分に出た様である、

國道に添はない事になつた。  
 また名古屋から東は現在の國道よりは甚だ異つた所を通つ

たのである、其の古道が何處であつたかは先きに述べた海道記、東關紀行、十六夜日記等を見ればすぐ知れる通りに皆旅行者は熱田の宮から潮の干いてをる時は、現在の國道より稍北の處を走り過ぎ潮の満ちてをる時は尙ほ北の方に陸廻りして古鳴海に出、此處から山中に辿つて二村山の峠に登り景色を賞でつ、今の國道は全く異つた山道を二村の宿即ち沓掛に出たのである、又此の沓掛から東は現在の田甫の内を岡崎近くまで行つて現在の國道に歸つたのである。

古へから鳴海瀉に就ては潮の満干に思を浮べて旅の徒々に歌を詠じたものも多く、到底此處に載け得ないが要するに地理的に言へば、熱田神宮の東は滿潮位以下の土地であり、古は海岸に堤がなかつた故に自由に潮の差引きした。こゝを年魚市瀉と言つたのである。

さくら田へたづ啼わたるあゆち瀉汐干にけらし

田づる啼わたる

高市連黑人(萬葉集)

櫻田は地名である、此のあゆち瀉は延長七町位で呼續稱

る高臺に達する、此處から古鳴海迄が所謂鳴海瀉であつて其の遠きは殆んま同じである、此の二つは古くから殆んま混同せられて一個所の様に稱へられて來た。

なるみ瀉汐瀨はるかに干にけらし

きのふの沖を通ふ徒尾人 行家

(夫木集)

の歌である。

二村山は峠で見はらしよく、大同二年(西曆八〇七)に背銘ある石地藏尊がある。

明治三年に没した刈谷藩大參事濱田雅昌氏は、此の古道に就てよく調査した、其の結果次の如くに記してをる。

鎌倉街道の儀岡崎の宿も池鯉鮒宿の間、尾崎村中より北に入り同様熊野權現森の真中を通り右踏み分けの森を往古唱來候段申聞候、右森を出て大濱茶屋北裏を通り遙かに北の方狐塚に申す所に一株の松あり、是古の並松跡の由里人申傳へ候、其れより松林數十町經て里村の出郷に至り田島の間里人に道を求め里村へ掛り、村際に乗せずの森を申

傳候山王の社御座候、下馬の觀音ミ共に旅人馬駕籠に乗り  
通り候得ば度々過も致し候儀有之、依つて此の森を乗せず  
の森ミ古く申來候里人申合候、田嶋を過ぎ松林を超へて八  
橋村無量壽寺へ參り本尊業平御作觀世音竝に古代橋杭沼邊  
に四ツ蜘蛛の燕子花は當地のみなりミ里人申聞候、村を離  
れて暫く業平朝臣のしるしなりミて五輪あり此の邊古松所  
所生へて數百年の佛を残し有之候、川を越へて田道の邊り  
に一株の松ありて往古の並木のあまのよし聞き傳候、細道  
を過ぎ坂を上り右の方に小松山の内下馬觀音の小堂石佛に  
て立給ふ。(中略) 島道を過ぎ駒場村を通り愛妻川を越し是  
れより山の細道を數十町行き兒子池ミ云池塘を過ぎて少し  
北手の山へ入る、間もなく東境村を通る、尾三兩國の境川  
を越へ大久手村を通り道の傍に榎の古木あり昔の道筋の  
由里人申傳ふ程なり、宿ミ申村へ至れば昔の有し姿ミ聞傳  
候へば八橋野路の宿ミ申せし時、當村も宿にて人馬繼致せ  
し所なりミ申聞候、宿名如何の儀やミ尋ね候へば其儀不覺  
只宿のみ申傳候由、右村を出て山添にかゝり遙かの山道

を過ぎ漸々峠に到候へば小堂御座候、五尺餘の石地藏二體  
立たせ給ふ、左りの一體は昔よなな化身ありて往來の人  
結約ありしを返つて何人が袈裟切りに切り落し候段里人の  
物語候、今半身許有之背の方に大同二年建之ミ彫刻の字認  
め有之、此の山を峠ミ里人申來候へ共二村山ミて古名顯然  
たりし街道の砌貴人方の讚歌數多御座候、今は二村山の名  
知る人稀なり、此處を過ぎ西の方へ下り數十町谷間坂路を  
歩行漸く相原村ミ申尋候へば、是れより鳴海西山王の森へ  
出東海道ミ一緒に相成候由に候に付道を求め參り候處、永  
祿の頃近邊合戰の時岩等所々に築き古道も遮りて有之幽の  
畦道相尋ね山王森へ出申候。(下略)

此の古道は今は今全く潰れ果て、到底辿るに由なきも兩村の  
宿ミ二村山の名勝ミが古史に明らかなる限り、現在の國  
道は其後に改修せられたる事は勿論である。

八橋は在原業平が伊勢物語に

三河國八橋ミ言ふ所に至りぬをこそ八橋と言ふは水の蜘蛛  
手に流れわかれて木八つ渡せるによりてなむ八橋ミは言へ

る。その澤の邊の木蔭におり居て餉くひけり、その澤に燕  
子花いこ面白く咲きたり云々」

こ言へるによりて、世にやかましき地名こはなつたので  
ある而しもこく取り立て、言ふ程の名所ではない。

更科日記の著者が八橋は名のみにて橋のかたもなく何の  
見所もなし、寛仁四年（西曆一〇二〇）の旅の日記に述  
べてをる。其後貞應二年（西曆一二三三）海道記に

雄鯉鮒が馬場を過ぎて數里の野原に一兩の橋を名づけて

八橋云ふ、砂に睡る鴛鴦は夏を辭し去り、水にたてる杜若  
は時を迎へて開きたり云々、仁治三年（西曆一二四一）

の東關記行には、「其のあたりを見れども彼の草思しきも  
のはなくて、稻のみぞ多く見ゆる」云書きつけ、また建治

三年（西曆一二八〇）十六夜日記には、「八橋にこまらむ  
こ言ふ暗きに橋も見えずなりぬ。

さ、がにのくもであやふき八橋を

夕暮れかけて渡りぬるかな

二十一日八橋を出て行くにいさよく晴れたり。

八橋に宿を取りながら、八橋の杜若に關する記事がな  
い。伊勢物語は天慶の頃の作と言はれる、更科日記より  
は五六十年前であらうけれども、八橋の記事は甚だ其の事  
實が覺束ない氣がする。

八橋名所の事は兎も角も、知立の馬場は今の駒場の附近  
で八橋なる所のあつた事もうなづかれ、此頃に街道のあつ  
た事も事實であつたと思ふ。

此の道が有松前後を通る今の國道に更へられたのは何時  
であらうか。

此の新國道に添ふ前後云ふ部落は、間米マメの分村であつ  
て、五軒屋新田も唱へ、有松はしぼりの名産地である  
が、是も新町アヲマチの轉じた名稱なりと言はれてをる、是等から  
想像しても決して古い事ではない。

直ぐ此の南にあたる桶狭間云ふ所は、有名な古戰場で  
織田信長が今川義元を奇襲して一舉にして之れをほぶり、  
天下に覇をなすの門出とした所である。

此の戦記は信長記なきに委しく傳へられてをる、當時の

戰圖を見るに、今までは甚だしく地形が異つて鳴海灣はずつと奥まで汐瀦ら込み屋崎が半島形に海中に突出し、今の天白川は黒末川と稱せられてをる、而して問題の鎌倉街道と稱せられてをる、而して問題の鎌倉街道は二村山から小坂相原を経て古鳴海に通じ宮に連絡し、現在の國道の位置には黒末川の支流らしきものが記載せられてをるに過ぎぬ。

當時の戰爭には既に種子島を盛んに用ひ、大部隊のかけ引きであつた。故に、砦が至る處に作られた勿論織田勢は今川勢を防ぐ爲に鳴海から相原にかけて、水野、岡部等を以て防戦につこめ、其等の土壘によつて著しく交通を妨げた。

信長は人も知る如く道路の大改良に、非常に貢獻した人である。

天正三年（西曆一五七五）信長公、篠岡八右衛門尉、坂井文助、高野藏、山口大郎兵衛尉を奉行にして海道筋幅三間半曲りたるを真直ぐにし、兩側に松柳を植ゑしめた事は、信長記に傳ふる處である。

舊道は景色こそよけれ、其の峠は海拔七十二米突旅人は一方ならぬ苦勞をしたに違ひはない、新道は漸く最高二十六米突旅人は如何に泰平の恩恵を謝したであらう。天正十年信長が武田氏を征して京都に歸る時は池鯉鮒に宿つて、清洲に歸つた、此の時は新道を通過したと思はれる。

是等の點から想像して此の新道は恐らく信長の改修したものであると思ふ。

其後豊臣徳川何れも道路には熱心であつて現在の如く平坦々たる道路となり兩側には老松亭々として長へに松籟を傳へてをるのである。

### 東三河に於ける東海道

矢作の橋を渡れば東は所謂東三河の土地である、古の交通した道筋は三本ある第一は岡崎の東約五里御油の追分から北に入り稻荷様で名高い豊川の町に出て此の附近で豊川を渡り吉田即ち今の豊橋の東部に出高師の原を経て遠江の



國に出、新居舞坂で濱名湖の口を渡り濱松方面に行く街道  
第二は豊川を渡つて本坂峠を越へて遠江に入り、濱名湖の  
北を廻つて氣賀を経濱松で第一の道と合する所謂姫街道と  
稱した筋、第三は現在の東海道即ち御油から小坂井を経て  
豊橋に出、第一と同じに濱名橋に出た筋である。

第一の線を通つた人

海道記

東關紀行

第三の線を通つた人

十六夜日記

丙辰紀行

東海紀行

婦家日記（往復共）

庚子道の記

此の第一と第二の道筋を比較すると第一の方が三角形の二  
邊を歩く事になつて二里餘の廻り道である、是れを厭はず  
豊川まで行つたのは稻荷參詣もあつたであらうけれども一

つは豊川の范濫の爲めであらう、即ち小坂井の東には然管  
の渡と稱して常に豊川の分水が流れ、また大水の時は豊橋  
に至る一里の間、皆水に浸る爲めに交通の杜絶を見る事は  
今でも稀ではない、東關紀行に

本野が原にうち出でたれば四方の望み幽にして、山なく  
岡なし、秦田の一千餘里を見わたしたらむ心地して草土共  
に蒼茫たり、月の夜の望み如何ならむと床しく覺ゆ、茂れ  
る笹原の中に數多踏み分けたる道ありて、行末も迷ひぬべ  
きに、故武藏の前司道の便りの輦に仰せて植ゑ置かれる柳  
もまだ陰を頼むまではなけれどもかつくまづ道のしるべ  
となれるもあはれなり。（中略）

豊川といふ宿の前をうち過ぐるに、或者のいふを聞けば  
此の道をば昔よりよくなるかたなりし程に、近頃より俄に  
渡津の今道といふ方に旅人多くかゝる間、今は其の宿は人  
の家居をさへ、外にのみ移すなご、いふなる。（中略）

おぼつかないさ豊川の變る瀬を  
如何なる人の渡り初めけむ

宜なり、東關紀行の著者が豊川廻りをして以來は、殆んご皆此の所謂今道、即ち第三の道筋を通つたのである。

而し延喜式の三河の驛は、此の渡津である、是から考ふれば最も古くは矢張り現在の國道筋を通つたのであつたが、本野が原に道をつけて、前司即ち北條泰時が道路吏員に柳を植ゑさせて、並木の開祖をなしたなき通行を容易ならしめたので、海道記の著者も東關紀行の著者も皆是れを通つたのである。

更科日記は然管の渡の事を記したるも其の著者が幼時記憶の誤りか地理に矛盾がある。

豊川は荒川であつて水毎に瀬が更り、従つて後世には然管の渡の煩もなく、今の國道筋が出来たのである、けれども尙少し水が出れば、たちまち交通杜絶する事は昔も今も變りはない。

次に姫街道は文字の示す通り、舊幕時代御姫様の通行多かりしと稱せらるゝ道である、何故そうか言へば一説には、今切新居の關所が女手形をやかましく言ひ、婦家日記

の井上通女の如く長く關止めを食ふこともあり、是れを避けて女ごもが濱名湖の北を廻つたことも言ふ人あれど、是れは疑はしい、寧ろ今切の渡が中古以來地形の變化で難所になり女ごもが船に酔ふのを避ける爲に此の道を通つたと言ふ方が實際であらう。

今切は太古は僅かに一町半たらずの口で、濱名湖からの水を大海に吐いてゐたが、時々閉塞せられて湖邊に害を與へたと言ふ事である、此の口には橋が架せられて海道記や東關紀行の著者等は容易に通行し得たけれども其後追々口廣まり、元祿九年に大破して二十七町さなり、寶永四年の地震津波で一里の長さに達し、現在に及んだ徳川氏は特に是れに架橋するの意志なく關の取締上便宜と考へて來たが昭和泰平の御代今は立派なる橋が架せられんごしてゐる。未だ東海道に就ては書きたい事があるけれども右の程度に止めて、次は桑名七里の渡と佐屋三里の渡及佐屋街道に就て誌すであらう。